

モップ・フットボール思想の研究 ～スポーツにおける社会的統合と暴力の関係を中心に～

A study on Idea of Mob Football: Focusing on the relation between Social Integration and Violence in Sports

1K04B233

山田 佳史

指導教員

主査 志々田文明先生

副査 石井昌幸先生

はじめに

(1) 研究動機及び目的

私は大学の講義で近代フットボールの祖先と言われる「モップ・フットボール」の存在を知った。これは中世イングランドの祭りであり、ゲーム中での暴力行為が公認されている。現代フットボールにおけるフーリガン現象の背景には、中世のモップ・フットボールとの関係があるのではないかと考えた。こうした問題意識が本研究の動機である。

本研究は、中世のモップ・フットボールと現代フットボールにおけるフーリガニズムの関係、そしてそれらを題材にスポーツにおける社会的統合と暴力の関係性について考察する。この目的を達成するために以下の課題を設定した。

- ① 中世イギリスの社会構造と遊びの特徴を考察する。
- ② 近代フットボールの前身である中世のモップ・フットボールの特徴と社会的機能を解明する。
- ③ フーリガン現象の背景にある思想を、イギリスの社会構造・産業構造の変化と関連付けて考察する。
- ④ 以上を踏まえ、中世のモップ・フットボールと現代のフットボール・フーリガニズムの関係、そしてスポーツにおける社会的統合と暴力の関係性について考察する。

(2) 研究方法及び史料

本研究は、文献研究である。主に依拠した次

の6点の史料を中心に展開する。

I 章 中世イギリスの社会と文化：①川北稔(1987)、非労働時間の生活史 英国風ライフスタイルの誕生、リプロポート ②池上俊一(2003)、遊びの中世史、ちくま学芸文庫

II 章 中世イングランドの祭り モップ・フットボール：③山本浩(1998)、フットボールの文化史、ちくま新書 ④中村敏雄(2001)、オフサイドはなぜ反則か、平凡社

III 章 フットボール・フーリガニズム～スポーツと暴力～：⑤井野瀬久美(1992)、子どもたちの大英帝国 世紀末 フーリガン登場、中公新書 ⑥ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング、大平章 訳(1995)、スポーツと文明化 興奮の探求、法政大学出版社

I 章

中世イギリス社会の特色は、「封建制度による身分制社会」、「農村社会」、「キリスト教社会」である。このような社会では日常生活から労働・文化まで全てが身分によって規定されており、社会の大半を占める農民(民衆)にとって遊びは、日常の生活空間の中で行われ、労働との明確な区別がなかった。

II 章

近代フットボールの前身と言われる中世イギリスの祭りモップ・フットボールがどのような特徴、社会的機能があったかを明らかにした。1番の特徴として、「明文化されたルールがなく、肉体的暴

力・粗暴性が認められていた」ことが挙げられ、中世の人々、特に男性は、このフットボールでの肉体的接触を通して楽しみを得たり、男性らしい強靱さ・勇敢さを示すとともに、自分が属する集団としての共同体意識を高めていたのである。ここでは、勝敗という結果は現在のように重要視されていなかった。

Ⅲ章

フリーガン現象の背景にある思想をイギリスの社会構造、産業構造の変化と関連付けて明らかにした。イギリスにおけるフットボール・フリーガニズムは、社会経済的に最も下位に属する下層労働者階級の男性が中心的役割を果たしており、フットボールの場で暴徒化することで男性としての攻撃的なアイデンティティを表明しているのでは

る。

Ⅳ章(結論)

I、II、III章で明らかになったことを踏まえ、中世のモップ・フットボールの思想と現代のフットボール・フリーガニズムの関係、さらにスポーツにおける社会的統合と暴力の関係性について考察した。中世においても近代においても、フットボールは男らしさの規範で、そこでの肉体的接触や暴力によって、地域社会における自らの存在・重要性を確認し、それを誇示する遊戯的闘争の場である。よってフリーガン現象というのは、暴力からの楽しみを奪った文明化(近代化)に対する人々の反発であり、中世の祭りであるモップ・フットボールの思想や慣習の名残であり、きわめてイギリス的な現象で現代的対応物と考えた。